

つぶやきは力か

梶井英人

私たちは、どんな人間がどんなことばを獲得することをめざしているのだろうか。自明とも感じられるこの問いは、もはや自明ではないのではないか。

二〇〇六年、『「国語力」観の変遷——戦後国語教育を通して』を書いた。二〇〇〇年代前半までの六〇年を見渡したとき、その最後に見出されたのは、ことばの教育の前提となっていた〈主体〉観の見直しの可能性という問題だった。

種々の言説が指し示していたのは、「主体的であることは、よいことか」という問いである。強迫的にゲームに参加し、選択する〈主体〉は果たして主体なのか。

「状況を読んでその流れに乗る能力——みんなの選択するものを選択するという方略——は、現在の抑圧的な状況に適応するという意味では一つの「解」である。しかし、それを『能力』と呼ぶことを『国語』は肯定するだろうか。」(1)

事態が進み、二〇一二年の時点で見据えなくてはならないのは、事実としての〈主体〉像の変化である。生活環境の加速度的な変化が、否応なく、〈主体〉観の変更を要求する。いいかえれば、〈私〉はどのようにして〈私〉を確認するかという問いを、個人が、そして、社会全体が切実に問わなければならない事態になっているということである。

当然この問題は、ことばの教育の設計に関係する。もし、ことばによる主体の維持が、これからも必要なのだとしたら、ほんとうにそれは可能なのか、可能だとしたら、どうすべきか、を考えなければならない。そして、その思考は、まったく逆に、ことばによる主体の維持など必要ではない、という見通しを同時に考慮することでしか成立しない。

指導要領を前提とするような思考は、もはや力を持たない。なぜなら、公的言説は、——いつのころからか——現実の影を追うものでしかないからだ。かつて、教育を設計した（と信じられたような意味での）公的言説は今や存在しない。

誰もが幸福になる権利と可能性をもつ。欲望は肯定されねばならない。戦後の出発点にあったこれらの思想を、例えば『新教育指針』（一九四六年文部省）は明示していた。戦後のことばの教育もその思想を核としてきた。『指針』は、討議法に一章を割き、六年生の討議記録を示しているが、ここに期待されていたのは、確かな〈人間〉どうしが確かな〈ことば〉を操る、という主体像であった。

その後、目標設定の力点の変化や方法の流行り廃りがあったにせよ、この、確かな〈人間〉が確かな〈ことば〉を操る、という主体像は、一貫して揺らぐことはなかった。

しかし、その主体像への信頼は、今、大きく引き裂かれている。

例えば文部科学省は、教育政策を行政が一元的に決め、画一的に展開できる状況ではないという。そして、「教育現場に関わる様々な立場の人間を、政策形成のプロセスに参加」させるため、二〇一〇年、現場対話とインターネットの活用による、「熟議」に基づく意見の収集に乗り出した(2)。従来の中教審ラインと違い、より積極的に下からの意見を政策に反映させようとする意図である。

このアイデアの前提は、もちろん、確かなことばをもった主体どうしの議論への信頼である。彼らは、自らの論理の整合性や意見変更の根拠について自覚的であるはずだ。気分で、瞬間的に意見を変える「熟議」などありえない――。

一方、このしくみには、インターネットによる意見収集がうたわれている。しかし、「リアル熟議」でのことばと、ネット空間の〈ことば〉は、同じではない。

韓国で、交流サイトによる選挙運動が解禁されるなど、ネット空間は、もはや、消費の次元だけではなく、政治の領域も支配しつつある。が、この空間に流れる〈ことば〉とは、ツイッターに代表される、瞬間的な〈つぶやき〉、あるいは、検索窓に打ち込まれる検索語の集成である。それはある意味で、無自覚な欲望が記号化されたデータにすぎない。そこに意味の焦点を見るのは困難である。

ここに、「ハーバーマスとかアーレントとか熟議民主主義とか、もう、どうでもいいよ」(東浩紀)という思想が現れる。東の描く未来図は、自覚的に言語を操る主体の意志ではなく、ネット空間での、無数の無意識の行動を技術的に集約した意志――データベースとしての意志にもとづく統治である。東は明確に、ことば・議論への過信を否定する(3)。

意識的な言語の力と、技術によって明示化される無意識の〈言語〉。私たちは主体を解体し、その自動〈言語〉にしたがう〈幸福〉に身をゆだねるのか。

ことばの教育は、この問いをもう避けて通れない場所に立っている。いったいだれがそれを意志しているのか。可視化された欲望はだれのものなのか。その「一般意志」に、ことばによって抵抗する〈私〉の存在は、まだ、可能なのか――。

破壊願望を代弁することばがもてはやされるといわれる(4)が、破壊する主体など、どこにもない。大きなことばを操る者もまた、小さなことばの集合によって押し流されていく。この荒野にも、ことばの可能性はあるか――あるだろう。しかし、その希望は、いったん、ことばに対する懷疑と絶望をくぐらないと、生まれてこない。それだけは確かである。

1 梶井英人『「国語力」観の変遷』溪水社

2 文部科学省「熟議カケアイ」<http://jukugi.mext.go.jp/>

3 東浩紀『一般意志 2・0』講談社

4 例えば、高村薫談話(朝日新聞二〇一二年五月三日)